

Book Review

歯科医院の感染対策マネジメントブック チームで取り組む世界基準のインフェクションコントロール

佐野喬祐 著

Reviewer

伊藤直人 Naoto Ito

(神奈川県小田原市・伊藤デンタルクリニック)

A4判変、136頁
カラー
定価 5,940円
(本体 5,400円+税 10%)
医歯薬出版刊



「感染対策」という言葉に対して違和感を覚える人こそ、真っ先に手に取るべき一冊である。本書は、単なる消毒や滅菌の手技マニュアルではない。

著者の佐野喬祐先生は、当院で副院長として勤務されていた頃に感染対策責任者を務め、院内の感染対策の基盤づくりに尽力された。当初より「世界標準の感染対策」を志し、新型コロナウイルス感染症の流行で感染対策に注目が集まる前から、海外のガイドラインに基づく感染対策を学んできた。感染対策のために海外へ研修に赴くという姿勢は、当時は珍しかったかもしれないが、まさにその探究心と行動力こそが、本書の根底を支えている。

感染対策は、理想のみで語られるべきものではない。臨床とは常に、「理想」と時間・コスト・人材といった「限られた資源」との間に生じる「矛盾」との戦いである。理想を掲げるだけでは続かない。だからこそ感染対策も、理想や科学のみではなく“持続可能で実行可能な仕組み”でなければなら

い。本書はその現実から向き合い、一般開業の歯科医院で実践可能な「臨床における感染対策」を提案している。

現在、多くの歯科医院では、「〇〇流」や「A先輩方式」といった属人的な感染対策がまかり通り、現場ごとにルールや実施内容がバラバラになっている。こうした“ガラパゴス化”した状況に対して、本書は明確な理由と、再現性あるマネジメントの必要性を説いている。感染対策は誰かの“感覚”ではなく、目的を見すえた科学に基づく“医院の基礎”でなければならないのだ。

とりわけ印象的なのは、「無駄のない感染対策」という視点である。手順を増やすことや器具を導入することを目的化するのではなく、「なぜそれを行うのか」「どこまで必要なのか」といった問いに立ち返ることが、診療の質と効率をともに高める鍵となる。これは感染対策に関する話でありながら、スタッフ教育や業務の見直し、さ

らには組織文化そのものに通じる内容でもある。

新規開業を予定している歯科医師や、感染対策に責任をもつ立場のスタッフ、自院の体制に不安を感じているチームにとって、本書は確かな“道標”となる。感染対策の正解が見えず悩んでいるすべての方にとって、本書は解決へと導く実践的な指南書となるはずだ。

「インフェクションコントロールがあつてのカリエスコントロール」。齶蝕や歯周病の管理と同様に、感染対策もまた“医療の質”を構成する重要な柱である。スタッフの行動様式や医院全体の雰囲気にも影響を及ぼすという意味で、本書は単なる技術書を超え、医院文化そのものを見直す契機となる一冊である。

『赤本』、『カリエスブック』そして本書『感染対策マネジメントブック』。この3冊は、現代の歯科医院に揃えたい、“開業三種の神器”の1つであると私は確信している。